

《正岡子規（36）の続き》その289

天涯茫茫生

列伝⑤ 長塚 節たかし（享年37歳）

生年 一八七九（明治一二・四・三）  
 歿年 一九一五（大正四・二・八）  
 死因 肺及び喉頭結核

歌人にして小説家。

茨城県結城郡岡田村国生こしよ（現石下町大字国生）に生れる。

長塚家は、この地方の豪農。父・源次郎は明治20年以降県会議員に数回当選の名士である。

県立水戸中学に入学したが、健康すぐれず中途退学。以後四年ほど療養のため何回か上京し入院。また塩原、草津に転地療養した。病名は脳神経衰弱といわれる。

父の購読する「日本」に載る子規の歌論に感銘を受け、意を決して面会を求め、教えを乞うこととなる。初対面は明治33年3月27日。

席上、室内の事物を題材として、一本の線香の燃え尽きる前に十首の歌を作ることを求められ、それが「日本」に載り、驚くと共に喜ぶ。

以後、上京のたびに二日にあげず訪問、談深更に及ぶのが常。根岸短歌会に入り、伊藤

左千夫、岡 麓、香取秀眞らと相識となり、左千夫とは殊に親交を結んだ。

左千夫に云わせると、子規と節との関係は「理想的愛子」である。節は郷里の産物の食物を子規にしばしば送った。それに対し子規は、包装の仕方、送り方などについて実に懇切な注意の書簡を送っている。迎も死の近い身とは思われない。また村のため産業を起し、或は村民の子弟を教育するなどの提言も行っていて、節に対する期待の大であることを示している。単に短歌の師弟としての関係とは思われぬ情誼を感じる。

節は短歌と共に多くの写生文を書き、小説を綴った。最大の長篇小説「土」は漱石の依頼によつて書かれ、「東京朝日新聞」に連載された。社内の評判は悪かったが、最後まで思うままに書かせたのは、主筆の池辺三山だったという。

作者の郷里の茨城県の鬼怒川のあたりの農村が舞台で、貧しい小作人勘次の妻お品は、貧ゆえにわが手で胎児を仕末し、そのため破傷風にかかり死亡する。

幼いおつき、與吉のきょうだいをかかえ、勘次は不如意な生活のなかで、後添えを欲しがるが、貧ゆえに実現しない。

やがておつきは年頃となり、村の青年たちの注目の的となるが、勘次は嚴重におつきの身辺を警戒する。

そのうちに勘次の親娘関係について忌わしい噂が村中に広まる。Incest（ドイツ語ではInzest 訳を書くことを好まぬ。辞書を引か

れたし）という現代も時に耳にする出来事が描かれている。

漱石は單行本「土」の序文として長文（実に長文）を寄せて、この作を評論している。娘が長じて贅沢を云つたら「蛆虫同様」「獸類に近い」この小説を読ませるつもりだと書く。社会の底辺の生活にも眼をそそがせるつもりなのかもしれない。

節は明治44年、のどに痛みを覚え受診して喉頭結核と診断され、各所の病院で切除や焼灼術を受けたが、最後は当時喉頭結核の第一人者と目されていた九州帝大の久保猪之吉教授の治を受けるため九州に赴き2度の入院の後に同地に歿した。

旅行好きで、北海道を除く殆どどの日本全土に足跡を印し、多数の短歌を詠んだ。以下に秀作の二、三を示す。

鴟もずのこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白  
 き乗鞍を見し（明治四十四年、乗鞍岳を憶ふ  
 十四首のうち）

生きも死にも天あめのまにまに平らげく思ひた  
 りしは常の時なりき（明治四十五年、喉頭結  
 核という恐ろしき病にかかりて、病中雑詠六  
 十三首のうち）

白埴しろはにの瓶かめこそよけれ霧ながら朝はつめたき  
 水くみにけり（大正三年 鍼はりの如く二百三十二  
 首のうち）